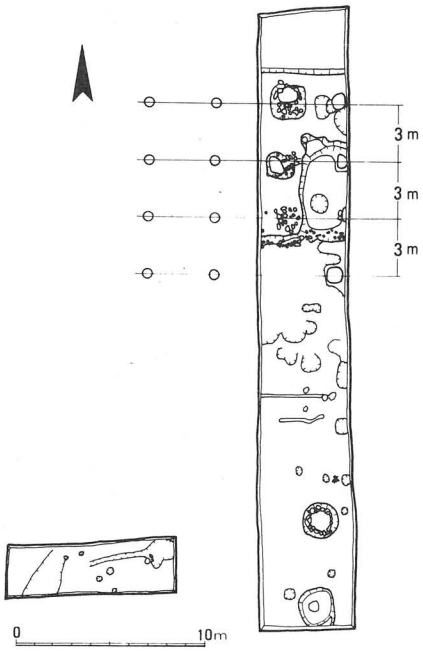
Ⅳ　大安寺の発掘調査

大安寺旧境内において家屋新築等にともなう事前調査を2件行なった。

北僧房　調査地は従来の大安寺旧境内発掘調査結果からみて講堂を囲む三面僧房の東北隅で、北僧房の東端附近と推定される。調査は33m×5mの南北トレンチ、9m×3mの東西トレンチを設定し、約192㎡について行なった。調査の結果、発掘区北側で中房の一部を検出したが、南半分は中世以降の土壙や撹乱によってすでに削平され、大房を検出することができなかった。鎌倉時代初頭と考えられる井戸1基を検出したに留まった。

遺構：中房・北面中房の梁行通りの礎石および根石列を2列検出した。1列に4つの礎石があり、大梁をかける位置にも柱をもつ梁行3間の総柱建物である。

梁行の柱間寸法は１０尺等間であり、『資財帳』の中房の記載や昭和４１年度西面僧房調査の中房の柱間寸法と一致する。桁行の柱間寸法については、礎石が動いているため、正確な数値は求められないが１０尺以上であろう。礎石は西列で２個、東列で４個の計６個を検出したが、いずれも原位置を移動している。東列礎石は、高低があり根石等の据付け痕跡が認められないことから、いずれも原位置から西に動いていると考えられる。西列礎石も若干移動しているものの、削平された南の柱位置をのぞいて、人頭大の根石をもった据付け痕跡が検出されている。礎石は東列南の逆截頭方錐形の凝灰石製礎石のほかは自然石を用いている。なお、梁行北側柱心から約1.6ｍ北で遺構面に落差（２０㎝）があり、基壇状になっている。



第６図　北僧房遺構配置図

井戸：発掘区南半で検出した。柱を転用したとみられる円形の井筒を用い、その上方は軒瓦・丸平瓦・塼・凝灰岩切石を積み重ね化粧している。井筒は、長さ約1.6ｍ、径0.8ｍあり、半截してからくりぬいたもので、下端には地下水を入れるための仕口が設けてある。出土した瓦器によって鎌倉時代初頭のものと考えられる。

遺物：遺物は遺構面を覆う暗灰色粘質土から多量に出土した。その多くは瓦類で、土器は少ない。瓦類は、軒瓦・丸平瓦のほか鬼瓦・塼などが出土している。大半は、奈良時代のものであるが、若干、平安・鎌倉時代のものも混じる。１２５点出土した軒瓦のうち、いわゆる大安寺式とよばれる単弁１６弁蓮華文軒丸瓦（６１３８）と、羊歯状に連なる３回反転均整唐草文軒平瓦（６７１２）の組み合せが半数近くを占めている。

土器類は量的に少なく、いずれも小片である。土師器（皿・杯・甕・燈明皿）須恵器（杯・蓋・鉢・壷・甕・浄瓶）のほか、瓦器・施釉陶器などが出土した。時期は、奈良時代中葉から鎌倉時代にかけてのものが混在する。施釉陶器には、灰釉円面硯・二彩皿・緑釉椀・皿・壷・青磁椀などがある。

他に埴輪が出土しているが、大安寺寺域内の杉山古墳のものである。

東僧房東方　調査地は、大安寺旧境内東面僧房の東側にあたる。

検出した遺構は、東西棟建物２棟、南北溝１条、土壙等である。検出面は地表下３０～４０㎝の灰褐バラス層（地山）である。東西棟建物は２棟とも西妻柱のみの検出であったが、柱通りを揃えて配置している。南北溝は幅４ｍ、深さ0.6ｍと大規模なものであり、東面僧房の外側を区画する位置にあたる。なお、凝灰岩製の切石(３５×８０㎝)が据付けられた状態で出土したが、その性格は不明である。